

明治留学生の史的先例としての遣唐使と中世留学僧

榎本 渉

このたび岩倉使節団のシンポジウムで報告する機会をいただいたが、実は私の専門分野は古代・中世史であり、近代史は専門外である。国際交流を主に研究しているという関係から、今回声をかけていただいたが、シンポのテーマにかみ合う話ができるかは少々不安もある。そこで今回選んだテーマが、「明治留学生の史的先例としての遣唐使と中世留学僧」である。

しばしば聞く語りとして、古代律令国家と明治近代国家は、ともに外国先進文化を積極的に受容したと言うものがある。大化の改新と明治維新を対比させ、あるいは遣唐使による唐文化の受容と明治の文明開化を対比させるという類いのものである（門脇禎二 1991、李成市 1995）。特によく語られるのが、遣唐使の留学生と明治の留学生の対比である。たとえば岩倉使節団が日本を出発した直後、1872年に初学者向けに出版された馬場吉人編『小学史伝』は、遣唐使に言及した上で、これと対比させる形で同時代の留学生に言及している¹。1905年の足立栗園『海国史談』（中外商業新報商況社）も同様である²。

このように遣唐使を岩倉使節団以後欧米に行った留学生に例える言い方は、今でも一般向けの書籍・講演や、ネットなどの各種メディアで、通俗的な語りとしてよく使われるところである。なるほど長い日本の歴史の中で、留学生が前近代にもあったことを語るのには、読者の視野を広げる上で意味があるだろう。しかしそれにもかかわらず、私としてはどこかこの言い方は引っかかる。それは留学の歴史の先例がなぜいつも遣唐使なのだろうということである。

昭和のシルクロードブームの影響もあって、日本と海外の交流といえば遣唐使という印象はかなり根強い。しかし冷静に考えると、遣唐使の文化的な影響は確かに大きい、その時代に派遣された留学生の規模は決して大きくない。外交関係が不安定だった7世

1 「扱其千餘年の後、万国開化、學術技芸百工に至るまで活業日に開け、各国通商交易して以て我国を利せんとする際に於て、誰か學術勉強せざるへけんや。人々洋行留学して我身を達し国家に益せん事を希ふべし。小学の徒是等の古事を認め後來眼目を高うせよ」（初編下、9丁裏）。

2 「之、遣唐使を今日に譬ふるに、明治維新後只管西洋文物の輸入を図り、其の長所を模して我面目を世界に施すやうになったのと同じ軌である。岩倉大使の派遣を最始として、爾後年々留学生を欧米に送る如きを全く遣唐時代と其「梯」を一にして居るのである」（15頁）。

紀は措くとしても、安定期の奈良・平安時代に派遣された遣唐使は、701年から838年の間にたった7回であり、しかも1回の遣唐使で派遣された留學生は請益生（唐に長期滞在せず遣唐使とともに行動し帰国する人員）を含めて大体十数名程度である（森克己2015、234頁）。7回全部でも100人くらいしか留学していない上、長期留學者はさらに限られる。

この後、最後の遣唐使が派遣された838年の後になると、日本には中国商船がいつも来航するようになる。日本の僧侶たちはこの船を利用して、ある時には遣唐使時代よりも頻繁に留学を行なった。特に鎌倉・南北朝時代には、宋に留学した入宋僧、あるいは元^{にっそうそう}に留学した入元僧がたくさん現れる。私が最近集計したところでは、中国と日本の間を往来した僧侶は、1185年から1370年の約200年間で、名前が分かるだけで558人から592人程度を確認できる。これは偶然残っている史料から判明するもので、おそらく実際にはその倍以上いたはずである。私は入元僧だけで600人から1000人くらいいたと考えている（榎本渉2021年）。南宋期に入宋した僧も加えれば、1000人以上に達することは間違いないだろう。あまり認識されていないが、規模の面でも頻度の面でも、前近代の留学の最盛期はこの時代であった。彼らが宋・元の文化を伝えたことで、鎌倉時代には宋元風文化が花開き、禅宗や儒学、さらには宋風の建築とか彫刻、書画、詩文などが盛んに行なわれた。ちなみに、最も有名な入宋僧として、曹洞宗の開祖の道元がおり、1223年に入宋している。実は今年（2023年）は岩倉使節団帰国150周年であるとともに、道元禪師入宋800周年でもある。

それでは中世の僧侶の留学は、明治以前にはどのくらい知られていたのであろうか。日本史上で留学が盛んな時代が鎌倉・南北朝期（宋元代）だったとしても、その史実がまったく知られていなかったのならば、近代に留学の先例として取り上げられなかったのは当然だということになるが、本当にそうなのであろうか。ここで日本最初の外交史書である『善隣国宝記』（1470年の跋あり）を見ると、その半分以上は同時代に明・朝鮮との間に交わされた外交文書を掲載したものであるが、元・高麗以前の中国・朝鮮との交流の歴史をまとめた部分もある。その始まりは漢籍や記紀にある中国・三韓諸国との外交記事、次いで遣隋使・遣唐使、続いて唐の終わりから宋までの時代には僧侶の往来を中心とした記事が収録される。その後には日元交渉や元寇の關係記事、そして同時代史（明・朝鮮との間の外交文書）が続く。江戸時代の明暦年間版本の丁数で数えると、遣隋使以前の部分は7.5丁、遣隋使・遣唐使時代は11丁、唐末～宋は11丁、日元交渉・元寇は6.5丁、そして同時代史は57丁である。唐末から宋代の僧侶の往来に関する叙述の分量は、遣隋使・遣唐使の叙述と変わらないことが分かる。室町時代の段階では、遣唐使も僧侶の留学も、ともに対外交渉の重要な歴史と考えられていたわけである。

江戸時代については、外国との交流を年代順に並べた『日本異国来往記』（1696年刊）という本を取り上げてみよう。この本の撰者遠山信武についてはよく分からないが、基本的な事項を簡便に整理したものとして、江戸時代によく読まれたようである。そこに収録されている記事の多くは外交使節や海賊、戦争に関するものが多いが、僧侶の記事

も無視できない程度に入っている。遣唐使以後遣明使以前の時代に留学した僧侶や来日した中国僧で本書に登場したものを列挙すると、円珍・惠萼・義空・真如（以上9世紀）・
ちようねん 齋然（10世紀）・じようじん 寂照・成尋（以上11世紀）・えがく 栄西・しゆんじよう 覚阿・えん 俊苒（以上12世紀）・えん 円
に 爾・ごつたん ふねい 蘭溪道隆・なん ほじようみん 兀庵普寧・みん き そしゆん 南浦紹明・無学祖元（13世紀）・せいせつししようちよう 明極楚俊・ぜつ 清拙正澄・ぜつ 絶
かいちゆうしん 海中津・じよりんみようさ 汝霖妙佐（14世紀）の19人となる。

明治時代には1884年に外務省記録局で編まれた『外交志稿』という本があり、その中の巻22の「學術宗教篇」には中国との文化交流関連の叙述が45頁ある。その約半分に当たる21頁（527～547頁）は、多くが唐の終わりから明の初めにかけて留学した僧侶の関係記事で、俗人を除いて54人もの僧侶の名前が挙がっている。このように僧侶の往来は、少なくとも知識としては室町から明治までよく知られていたわけである。しかし、近代の歴史の語りの中で、その事跡は両国の文化交流の歴史としては扱われなくなった。おそらく現代の人々の多くも、中世の僧侶がこんなにたくさん留学していたという史実はあまり認識していないのではないか。

明治時代の歴史叙述を見ると、中世の留学僧の情報はほとんど盛り込まれていない。たとえば明治前期に出版された田口卯吉の『日本開化小史』（1877～1882年）などは、歴史的な出来事として遣唐使は取り上げているが、入宋僧や入元僧にはまったく触れていない。1890年に出版された松井広吉『新撰大日本帝国史』（博文館）は、臨済宗と曹洞宗の開宗に関わって両宗開祖の栄西・道元の入宋に言及するのみである。より専門的な外交通史的な著作も、この点は同様である。中島滋太郎『日本外交之大勢』（博文館、1894年）や足立栗園『海国史談』（既掲）も、遣唐使には一定の分量を取っているが、僧侶については栄西・道元など特定の有名人を挙げるだけで、文化運動として多くの留学僧がいたことにはまったく触れていない。この扱いの差は一体何なのであろうか。

想定される回答としては、しよせん彼らの事績は文化史の範疇であって、日本の近代化という国家的な使命を帯びた明治の留学生と一緒に扱うようなものではないのだ、ということがあるのかもしれない。一方古代の律令制の導入の前提には唐の外圧があつて、これに対処すべく唐の文化を学び取るという使命感が遣唐使の留学僧にはあつた。これはたしかに、西洋列強の外圧を前にした明治の西洋化と比較ができる。これと異なり中世の坊主たちは、勝手に中国に行っただけだということにもなりかねない。しかし彼らとて、決して国家・社会を意識した使命感を持っていなかったわけではない。鎌倉時代の僧侶たちが本格的に留学を始めるのは1180年代後半からであるが、この直前には治承・寿永の内乱、いわゆる源平合戦があつた。この全国的内乱を仏教は止められなかった。つまり、日本の仏教は鎮護国家の使命を果たせなかったのである。日本仏教界では、これを反省する動きが生まれる（平雅行2017、449～452頁）。何とかして仏教を復興しなければいけない。その一つの解決方法として、「中国に行って、本当の仏教を伝えてくる」という運動が起きた。現代人にとっては、仏教による鎮護国家など無意味に思えるかもしれないが、当時の人は本気である。彼らは彼らなりの国家的危機感と使命感を持っ

て留學したのであり、しかもそれは当時の社会では一定の説得力を持っていた。それを遣唐使や明治の留學生と全然違う個人の遊びのように捉えるのは妥当ではないだろう。

むしろ明治の人々が遣唐使と明治の留學生を結びつけた根拠は、その使命感よりも、国家事業として派遣されたという形式面と理解した方が良いかもしれない。明治人がこの点を意識して遣唐使に注目したのだとすれば、称えたかったのは使命感に燃える留學生たちではなく、むしろ留學生を送り出す国家の「開明性」だったのではないか。その点で遣唐使と明治留學生を結びつける言説は、いかにも近代的な国家中心の発想から生まれたのではないか。これに対して国家権力と関わらない民間宗教者の自発的な行動だった僧侶の留學は、国家を背負った明治時代の留學とは異なるものと考えられ、国家の歴史叙述からは除外されていったのではないか、というような見通しを今は持っている。

さて、大正になると歴史研究の進展とともに、高見健一の『日本対外小史』（丸善、1914年）や斎藤斐章の『日本国民史』（培風館、1920年）など、僧侶の留學と宋・元文化の伝来について言及するものが現れる。その中で興味深いのは、東京帝国大学で史料編纂に携わった仏教史家、辻善之助である。彼は講演の原稿などをもとにして、1917年に『海外交通史話』（東亜堂書房）を刊行している。本書は対外関係の通史の形を取っており、入宋僧については平安時代の人を数人挙げているが、鎌倉時代は完全に無視している。しかし、1930年の増訂版（内外書籍）では「日宋交通」「宋文化の影響」の2章を追加して入宋・入元僧による鎌倉時代の宋代文化導入について詳しく触れ、さらに「日本文明の特質」の章にも大幅に加筆を行ない、日宋交通の盛況に言及している。つまり初版ではほとんど無視された宋元文化の叙述が、増訂版で急に増えているのである。1938年の『日支文化の交流』（創元社）では入宋・入元僧の叙述はさらに詳細になり、むしろ本書で一番充実しているのはこの部分であると言っても良いほどである。そして以上の成果は、彼の代表作である大著『日本仏教史』全10巻（岩波書店、1944～1955年）に受け継がれていくことになる。

一流の仏教史家である辻氏が、『海外交通史話』初版の段階で鎌倉時代の僧侶の留學の史実を知らなかったことはありえないと思う。実際に1919年に刊行された『日本仏教史之研究』（金港堂書籍）には、そうした僧侶の事績が幾つか取り上げられてはいる。しかし明治時代の他の研究書と同様、本書でも留學は名僧の事績の一つとして挙げられるだけで、当時の文化運動として僧侶の留學や宋元文化の摂取が広く見られたという視点は出てこない。おそらく辻氏は対外交流と僧侶の留學は異なる文脈で理解していた。そしてそれはおそらく、当時の歴史学の世界では一般的な考え方だったのだろうと思われる。

この点を辻氏が増訂版でアップデートした背景には、大正から昭和初期の仏教史研究の進展があったと考えられる。たとえば、入宋僧の文化的意義を高く評価した初期の著作として、1916年の鷲尾順敬『鎌倉武士と禪』（日本学術普及会）があり、また1926年から1927年にかけて刊行された木宮泰彦の『日支交通史』2巻（金刺芳流堂）がある。辻氏はおそらくこうした研究を見て、国家事業とは絡まない僧侶の留學も対外交流史の^{ひと}一

こま
齣として見るべきと考えるようになったのではないだろうか³。

なおこうした研究成果は戦後の対外関係史研究でも十分には取り入れられず、いわば明治時代に分離された入宋・入元僧の歴史と対外関係史はずっと統合されずに最近まで来ていた。昭和の終わりくらいまで、僧侶の留学という文化運動は仏教史家の間でだけ共有される特殊知識としてとどまってきた。

まとめに入ると、実態として中世の入宋・入元僧の留学は、遣唐使の留学僧以上の規模を誇り、室町期以来その事績は史実として認識されてきた。しかし明治時代になると、国家事業としての留学生派遣に関心が向けられ、留学の前史としてはもっぱら遣唐使が意識されるようになり、入宋・入元僧は言及されなくなった。その後大正時代の仏教史研究が進展するとともに、留学生としての入宋・入元僧が改めて認識されるようになったのである。以上のようなことを本報告では指摘した。

明治時代に留学生の前史として遣唐使のみが顧みられて、僧侶の私的留学が除外されたのは、つまり知識の欠如の問題ではなくて、近代における歴史認識、また価値観の問題だと言うことができる。その背後にあったのは明治時代に強まった国家史への志向だったのだろうと推測している。僧侶の留学が言及されなくなる具体的なプロセスの検証は、近代史研究者でもない私には手に余る問題であるが、おそらくそこには江戸時代の国学・水戸学の興隆や、排仏論の影響があったのだろうと、私は見ている。これは幕末維新期の主張に影響を及ぼした言説の内容を具体的に調べることで、明らかになるだろうと思われる。

引用文献

- 榎本渉「日元間の僧侶の往来規模」櫻井智美他編『元朝の歴史——モンゴル帝国期の東ユーラシア』（勉誠出版、2021年）。
- 門脇禎二「大化改新は存在したのか」『「大化改新」史論』下巻（思文閣出版、1991年）。
- 平雅行「鎌倉仏教の成立と展開」『鎌倉仏教と専修念仏』（法藏館、2017年）。
- 森克己「遣唐使」『新編森克己著作集5』（勉誠出版、2015年）。
- 李成市「古代史にみる国民国家の物語」『世界』第611号、1995年。

3 辻は『海外交通史話（増訂版）』の「日宋交通」の章の146頁で入宋僧に言及する際に、「近頃木宮泰彦氏の労作日支交通史にはそれ等の人の名が多く収めてある」と明記しており、木宮の著作を読んでいたことが明らかである。